

# 大東市立歴史民俗資料館 資料解説シート

## 遺跡紹介

### 「飯盛城跡」の壇列建物

飯盛城跡は、大東市と四條畷市にまたがる標高314mの飯盛山の山頂を中心に築かれた、戦国時代末期の山城跡です。享禄3年(1530)に、細川晴元の被官である木沢長政の居城として、はじめて文献上に登場します。その後、安見宗房が城主となつたのち、永禄3年(1560)には、当時の天下である京都を含む五畿内を支配していた三好長慶が芥川城(高槻市)から移り、居城としました。その後、飯盛城は三好政権の政治拠点として機能したと考えられています。長慶が城内で没した後、家督を継いだ三好義継が、永禄13年(1570)に若江城(東大阪市)へ移つたことで、飯盛城の城としての機能は停止したと考えられます。

城跡の規模は、東西約400m、南北約700mを測ります。山頂を中心に、南北に伸びる主尾根上に主要な曲輪を配置し、さらにその主尾根から東西方向に伸びる尾根上に小曲輪群を配置しています。近年の調査の結果、飯盛城跡は城内全域に石垣が用いられていたことが判明しました。また、石垣の他にも礎石建物や、瓦葺きの建物の存在が確認されています。これらは、織田信長が築いた城に始まるるとされる織豊系城郭に共通する3要素であり、長慶はこれらの要素を信長に先行して、取り入れていたことが分かっています。



位置図



飯盛城跡 全景

## V郭(御体塚郭)について

飯盛城跡の北部には、V郭(御体塚郭)と呼ばれる曲輪があり、長慶の遺体を仮埋葬したという言い伝えが残されています。曲輪の中央には露岩があり、「磐座<sup>いわくら</sup>信仰<sup>しんこう</sup>」との関連性が推測されています。発掘調査の結果、塼列建物跡と、神社の社殿の基礎の可能性がある石組遺構の2棟の建物跡と、台付皿<sup>せんれつたてものあと</sup>をはじめとする土器や瓦などが発見されました。台付皿は、春日大社(奈良県奈良市)の祭祀で使用されている「ごんばい」という台付皿に類似しています。このようなことから、V郭(御体塚郭)は宗教的な空間であったと考えられています。

## 塼列建物について

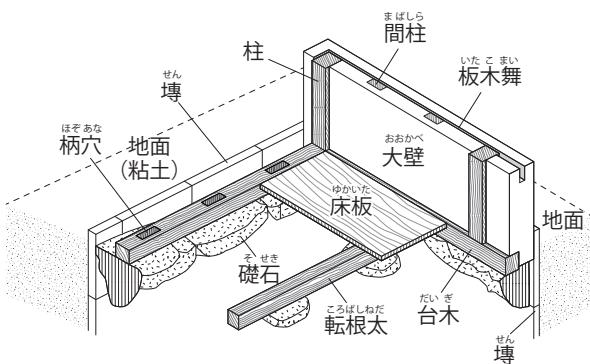
塼列建物とは、基礎部分に「塼」と呼ばれる板状の焼き物を、立てて囲った建物のことです。防湿や防火に優れているため、蔵として使用される事例が多く、主に中世や近世初頭の都市遺跡や城跡で確認されており、近畿地方を中心に分布しています。城跡における塼列建物は、蔵としての用途と、櫓としての用途に分けられます。前者の例として高屋城跡(羽曳野市)、後者の例として置塩城跡(兵庫県姫路市)が挙げられます。

V郭(御体塚郭)からは、4m×6mの規模と推定される塼列建物が確認され、34cm四方の塼が使用されていました。また、瓦も出土しており、建物への瓦使用が判明しました。しかし、出土した瓦には、軒瓦<sup>のきがわら</sup>が含まれていないことから、棟部分にのみ瓦が葺かれていたと考えられます。

飯盛城跡の塼列建物は、遺構が曲輪の端に位置していることから、櫓であったと考えられています。



塼列建物跡 検出状況  
(四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館提供)



塼列建物 基礎構造模式図  
(續伸一郎2010「港湾都市境における蔵遺構」よりトレース・一部加筆)